

# 素朴実在論の普遍性

木 之 下 恒 雄

## 1. はじめに

古代ギリシャに始まる形而上学のなかに存在論があり、存在者やその変化を問う哲学が発展してきた。何が存在するのか、という問いに答えるものとしては多種多様な存在論がある。その中の一つであり、人々が日常的な観点で多様な存在に接するときに、その対象を認識する際の説明方法である素朴実在論がある。今回はこの素朴実在論について具体例を引きながら論を進める。そして素朴実在論が言語に依存し、かつ共同主観によって成立することを示す。さらに素朴実在論が科学的実在論や観念論、唯物論、唯心論、現象学などの、哲学分野の幅広い基礎になっていること、すなわち素朴実在論には普遍性があることを示す。なお、今回は素朴という意味合いから、特に必要が無い限り実在と存在の差にこだわらずに論を進める。

## 2. 存在論

### 2.1 素朴実在

存在とは、具体的であれ抽象的であれ、広い意味で「在る」ということである。人が意識の中で何かを思う対象を観念といい、その観念とは独立に客観的に存在することを実在という。机上のカップは人がどう思うとも、机上に実在している。そして実在論とはこの世界に実在するものは何か、何が実在するのか、という問いに対する説明の方法である。「在るものは在るし、無いものは無い」という安易な反駁は同語反復であって意味をなさない。したがって「何が実在か、実在は何か」という問いに対して積極的に説明が

求められるが、しかしこれに答えるのは容易ではない。容易ではないことから、歴史の流れに沿って複数の存在論が登場することになり、哲学の分野をかまびすしくしてきた。この中であって素朴实在論と名付けられた实在論がある。最初に素朴实在論について、これまでの一般的な立場で考える。

まず素朴という語の意味を手元の辞書（新小辞林1977三省堂）で調べると、①自然のままで、飾り気のないこと、②単純であり発達していないこと、とある。この言葉が付加する实在論であるから、哲学的分析を経ていない、重みのない浅い説明である、と理解される。岩波哲学小辞典（1994岩波書店）によれば素朴实在論とは、「外界がわれわれの意識とは独立に存在することを認める、自然発生的な無意識的な唯物論の見方」とある。短いながら素朴实在論が何であるかの正当な説明となっている。

素朴という形容詞がついていることから「単純・無知」という感触がつかまとう印象もあり得るが、むしろ私たちの日常感覚からすれば「当たり前」あるいは「まっとう常識」と理解するほうが適切である。身の周りを見れば目に映るもの、耳に聞こえる音があり、手を伸ばして取った蜜柑を頬張れば、鼻孔に香りが広がり、甘酸っぱい味を舌に感じる。自然な風景であり、この風景の中に生活や仕事があって、これらが人々の世界を作っている。人々はこの世界で生きている。その生き方は素朴实在そのものの実現である。素朴实在論者ではない観念論者の哲学者でも、空から落ちてくる噴石を見て「単に自分の心に映っている仮象に過ぎない」とは思わない。身を翻して噴石を避ける素朴实在論者として行動する。

素朴实在論のいくつかを例で挙げてみよう。雨上がりの空に掛かる虹の橋は、空のあそこの位置にある、と思う。また、赤い花を見て花卉自体が赤いと思う。テーブルの上にカップがあって、カップ自体が自分とは独立に不変に存在する、と。

## 2.2 科学的实在論

この素朴实在論を容易に攻撃するのが科学的实在論である。科学はその

進展に伴って世界観を変えてきた。量子論や不確定性原理などの難しい理論を持ち出さなくても素朴实在論を圧倒する。雨後に太陽と反対側の空に掛かる美しいアーチの虹は実在するものであるかどうか。雨滴のプリズム効果で太陽光線が色分解し、太陽光線との角度でアーチ状に見える現象が虹である、と科学的に説明できる。したがって虹は実体としては実在しない、と科学的实在論は教える。また赤い花は、人の目に赤く見える波長の電磁波を反射しているだけであって、赤の色自体が実在するのではない、と説明する。またカップの真の実在はカップ自体ではなく、カップを構成する分子、原子、素粒子の集合である、とまで説明する。生半可な素朴实在論は押し黙ることになる。

このような環境では素朴实在論は「単純・無知」な説明であるという印象の下に置かれてしまう。しかしながらカップは究極的には素粒子に過ぎないとするのは還元主義である。還元された「素粒子がある」という言明は主張が幾分スマートになるものの、その論拠は素朴实在論である。「素粒子がある」という言い方は「カップがある」という言い方に異なるところがないからである。後述するが、この「言い方に異なるところがない」というところは素朴实在論のポイントの一つとなる。

### 2.3 カントの批判論との関係

哲学の分野では存在者を扱う形而上学から発展して、その存在者を見る側、すなわち対象を見るその方法と内容を検討する方向が出てきた。認識論の登場である。認識者があって存在者がある、あるいは存在者があれば認識者がある、という説明の方向である。ここでは存在者すなわち対象よりも、認識主観が重要視される。この認識論の一つとしてカントの方法を検討してみよう。

カントはその著である『純粹理性批判』で、人には世界を見るときその見方に、きっちりした枠あるいは構造のようなものが先験的にすなわち経験に先立って備わっていると。人は空間・時間の中で感覚を通して

所与に接し、その所与を、人が先験的に保有する仕組み（範疇＝量・質・関係・様相）を通して、それが何であるかを認識するという。したがって認識対象の元の姿であるとする物自体を知ることにはできない、としている。また経験を超えて理性が把握しようとする対象は超越論的仮象として避けている。

カントの説明は、簡単にいえば人は例外なく明確な先天的フィルタを通して世界を見る、ということである。裏返せばフィルタを通さない世界は見られないということである。

このとき素朴実在論はどのように関わってくるのであろうか。真なる実在を見ているつもりであろうが、実際は色眼鏡（範疇）を通してしているので真の実在（物自体）とは異なるのだよ、と批判されたとする。ところが色眼鏡を通して見た、色の付いた対象（現象）が、真なる実在に素朴に変容してしまう。これは赤い花が実在するのと同様な構造である。加えて範疇ということ自体が素朴実在の枠に捉えられてしまうのである。カップが実在し、交通法規が実在するように、範疇が色眼鏡として実在することになる。フィルタを通して見るという事態も素朴的に実在することになる。つまり前述した「言い方に異なるところがない」という点がポイントなのである。

### 3. 言語との関係

#### 3.1 言語と概念の創生

ウィトゲンシュタインは、私的言語は存在しない、と言っている。これは一人称感覚に関する言明であるが、ここでは少し拡大解釈してみる。仮定として絶海の無人島に置き去りにされた赤ん坊が奇跡的に成長し、成人になったとしてみよう。この成人に言語が伴うであろうか。叫び声や唸り声はあるにしても通常の言語というにはほど遠いものであろう。私的言語が存在しないということを押し進めれば、個人毎に言語が異なる集団というのはあり得ない。言語は集団から生成し、集団の制約と助長を受ける。

集団があつてこそその言語であるといえる。

その集団内で生成された言語は具体的な指示内容としての概念を持つ。食料としての、うさぎ、スイカ、マンゴー、というふうに名辞ができる。人にも名辞がついて固有名詞としての名前がつき、主体となり、客体となる。ここに、熟している、腐っている、などの状態を示す語や、対象を操作する動詞としての語が生まれる。ここまですれば、「誰が何をどうする」「何はこうこうである」という言語と物語が完成する。

もちろん、言語生成に順番がある訳ではなく、同時的であり、経時的でもあると考えるのが順当である。この言語の持つ特性をここでは「言語集団規約性」と呼んでおく。言語集団規約は集団毎に存在し、かつ、大きな集団内に部分集団を抱え、重層構造となる。言語集団規約性は言語の持つ普遍性であるが、一方、その内容は地域・民族・年代とともに変容する。古代の日本語と現代の日本語、方言、そして外国語があるように。

ただし、言語が集団の制約・助長を受けるのは免れないとしても、言語の実践の担い手は個々の人であるから、個々の異なる実践がある。すなわち、集団共通の厳しい規約のなかでも、個人が個々に言葉を話すのであるから個々の違いがある。この違い、すなわち個人間、集団間、国家間、時代間の空間的差異や、時間的変動を「むら・ゆらぎ」としよう。むら・ゆらぎは民度、宗教、科学観などにも存在する。この観点から実在性の実態認識にも、むら・ゆらぎが存在することになる。

「概念」という語を手元の辞書で調べると、「個々の具体物から共通した内容を取り出し総合して得た心的内容（もの）」とある。バラ、ボタン、ユリなどの個々の花から花の共通点を見出し、再構成して得た心的な存在ということになる。この論点は個々存在から共通点を抽出して得た分類名ということになる。心的存在に名辞を付加して自己の外の対象に一致させれば、その対象が自己の外に実在化される。心的存在が具体的な一例となって「花」が実在する。なお、この説明はプラトン流の、最初に「花のアイデア」があり、これが個々の花において顕現する、との説明には反する。

ここでプラトンのアイデアを素朴实在論的にアレンジしてみよう。アイデアなるものが辞書の記述にあるように、「再構成して得た心的存在である」とすれば、私たちは心的活動により日々新しいアイデアを生み、知らない古いアイデアを捨てていることになる。

### 3.2 概念は言語で示される

赤、緑、青、黄などの普通の色は誰でも相互に識別でき、その色を知っている。そしてその色が素朴に実在する。一方、色を対象とする専門分野の人は多数の色を、その固有の名辞を使って見分けることができる。たとえば萌黄色、臙脂色は専門家には明瞭に見える。しかし普通には使われなない色の名辞であって、普通の人には色相を見分けにくい。萌黄色は緑色に、臙脂色は赤か茶色かに分類されてしまう。その結果として普通の人には萌黄色も臙脂も見えず、それらの色はその人には存在しないことになる。もっとも目にはその色の波長の電磁波が入り、網膜に映り、脳に信号が送られているのではあるが。

リタ・カーターは著書『脳と意識の地形図』の中で次のようにいう。

「新しい感覚は、概念のテンプレートのなかに置いてはじめて意識にすることができる。生まれつき盲目だった人が、あとで目が見えるようになった場合を考えてみよう。その人の脳は、視覚情報が入ってきても画像として意識することができない。だからものを見る訓練として、手触りの概念といったすでに持っている非視覚表現を応用する必要がある。ワインの素人は、どんなビンテージのものを飲んでも同じ味に感じるだろう。ところが手持ちの概念（樹皮の香り、こくがある、シャープな）を借りてきてそこに当てはめれば、味のちがいがわかるようになる。」<sup>1)</sup>

すなわち、対象の認識には概念が先行するということである。ワインの

味も概念次第という味気ないことになるが、赤、緑、青、黄などの色の色相も言語で示される概念に依存するということになる。前述の萌黄色と臙脂色の問題に戻って、素朴実在論的に2色の有無を問う場合は、萌黄色と臙脂とが存在しない、とはいわず、その人には見えなかった、という。実際に色を知るには色自体と色名辞とを一致させる経験が必要になる。要するに概念（色）は言語で示されるということである。全ての色は人の共同体に含まれており、その中のどの色を識別できるかは、個々の事例による、ということになる。これは錯視や見間違いの場合と同様である。概念は明確であったり、曖昧であったり、矛盾したりする。

### 3.3 事実は言語によって構成される

追い払われて逃げ帰った子猫が、通常とは異なる鳴き方で、追い払われた「事実」を飼い主に訴える。飼い主は子猫に「言葉」をかけて「事実」を尋ねるが、子猫は鳴くばかりである。ここでは子猫は言語を持たないため、追い払われた「事実」を構成できない。

人においては事実を事実として正しく伝えることが責務であり、事実とは異なる説明は虚偽であり厳しく責を問われる。しかし事実を説明するとき使用されるのは言語である。言語が介在することになる。真なる事実が存在し、この事実にして正しく言語で説明されるものが、正しい事実である…というのが一般的な事実というものの認識であろう。ここで二つの問題が浮かびあがる。

第一の問題、説明以前の真なる事実とは何か。「ボールが飛んで来て窓ガラスに当たり、ガラスが割れた」事実を私が目撃したとする。しかし、この説明自体に問題がある。「…ガラスが割れた」のは、「事実」というよりすでに事実の「説明」になっている。だから「…ガラスが割れた」説明以前の事実とは何か、ということになる。こうなると説明以前の、その説明以前の、…と無限遡行になってしまい、意味をなさない。ここからいえることは説明に先行する事実は存在しない、ということである。少し譲歩し

ていえば、私はボールがガラスに当たるのを目撃して、その印象を記憶している、ということになる。通常の言語を持たない動物もそのように事態を把握するだろうからである。

第二の問題、すでに例として挙げた子猫は事実を構成できなかった。それは言語を有しないからである。

以上から事実は言語に依存し、言語によって構成される、ということになる。すなわち、事実が先行して、その事実を言語で説明する、というのではなく、言語が先にあって、この言語によって事実が構成される、ということである。

これは社会常識とは正反対となる。正しい事実を正しく説明することが美德であるからである。しかし、この常識も崩れる場合がある。それは裁判である。検事は被告の所業を証拠とともに調書によって事実Aとし、弁護士は被告の所業を証拠とともに反論によって事実Bとする。裁判官は双方吟味の上、事実Cとして裁定する。ここには互いに矛盾する三つの「正しい事実」がある。またその中から裁判官の裁定が最終的に「正しい事実」となるが、不幸にも冤罪という誤審もある。興味深いのは再審という手続きで次の新しい「正しい事実」を発見することである。このことにも紛うことなき「真の事実」が真理として彼方にある、という幻想があることを示している。繰り返すが正しくは、言語が先にあって、この言語によって事実が構成されるのである。それでも「事実があつての事実だろう」と反論されるであろうが。これに対しては「何かがあつて(X)それを言語で事実化(A)する」と答えておきたい。「Xがあつて、それはAである」という形である。

さて、こう述べておきながら注記すべき点がある。先ほどの子猫は言語がないために事実を構成できないとしたが、これは猫対人の場合である。猫対猫では人対人とは異なるコミュニケーション方法で、何らかの事実が構成できると考えるのが自然である。

かつてテレビで放映されたことであるが、米国の研究機関のカラスの実

験調査がある。まず捕獲した野生のカラスにいじめを与えた後に空に放した。後刻、いじめた人間が広場に登場すると、そのカラスが、いじめた人間を特定して、この人間の存在を仲間のカラスに知らせた、という。このほかにミツバチが花のある方向などを8の字ダンスで仲間に知らせる、というのはよく知られた話である。この場合、カラスやミツバチに内属するレベルや質において事実の構成ができるといえる。

既述した「言い方に異なるところがない」として素朴实在論に他論を引き寄せたのは、事実は言語に依存する、ということに根拠を置くのである。「Aが在る」との言明はその論理根拠が何であれ、それは素朴实在の「カップが在る」と異なる。「Aが在る」いった瞬間に素朴实在論が背後に回るのである。

### 3.4 事実の言語依存の問題

事実が言語依存であれば、それは次のようにも受け取られる。すなわち事実は絶対存在ではなく、相対的に人依存であることになる。そうなれば真理や社会信用に値する事実は願っても存在しえないことになるのではないかと。事実は絶対存在ではなく相対的に人依存ではあるが、しかしながら真理や社会信用に値する事実は存在できる。それを保証するのが論理や倫理であり、科学であり、人の共同社会である。ユークリッド空間においては三角形の内角の和は2直角であり、日本国内において最高峰は富士山である。閉じた論理空間や定義に基づく数学には絶対的な真理が存在し得る。一方でしかし人間社会では時代・民族・国家・宗教・科学などの変数の関数として真理や事実は存在するのである。よって唯一の真理が存在する訳ではない。相矛盾する形で世界に真理が多数存在する。宗教戦争はその証左である。それぞれ信ずる神が真で、異教神は偽となる。非ユークリッド空間においては三角形の内角の和は2直角にはならないことがあり、富士山が噴火で崩壊すれば日本最高峰ではなくなる。

## 4. 共同主観と四肢的構造

### 4.1 共同主観と四肢的構造

廣松渉は『世界の共同主観的存在構造』で「在る」と人がいう存在対象について共同主観という立場をとる。それは人が「カップがある」というとき、「その人は、多数の人々の一人として（共同主観の代表として）、目の対象物を、共同主観がカップと称する一例として」カップがあるというのである、とする。カップという名辞とモノを支える共同体があり、共同体の一員としての私が「カップ」ということになる。廣松渉はこれを現象的世界の四肢的構造としている。平たくいえば、「カップが在る」という表現の根底は「①皆がいて、②私はその中の一人として、③皆がそういっているように、④私とそのモノをカップとして捉えて、カップが在る、という」ということである。皆がいてその共同主観の中に自分がいて、僭称するかたちで自分が所与をカップが在ると廣松渉はいう。これに従えば、対象に迫るにはカントの範疇に加えて共同主観の枠が不可欠になってくる。そして重要なことであるが、共同主観とは不特定多数者の主観である。権威ある正統者の主観だけではなく、時間・空間を横断する不特定多数者の共同主観である。ここから当然のこととして共同主観内に差異や矛盾が含まれることになる。誰もが共同主観の構成員であるから、むら・ゆらぎを免れない。すなわち共同主観は素朴実在論が担保する形となっている。実在するものがあって、その通り（共同主観的）に把握できれば正しい実在認識となり、そうでなければ錯覚・幻覚・非科学的と判断される。

共同主観的であるから、時代・民族・宗教依存性がある。現代では天動説は誤りであるが、中世ヨーロッパにおいては正当であった。その時代において太陽が地球の周囲を回るのは正しい太陽の実在性を表していた。現代であっても視点を宇宙のかなたに置けば、太陽も地球も共に銀河系のなかで動いているから天・地動説ということになる。

注意すべきは共同主観なる一様なものが規範としてある、という訳では

ない。人毎に認識・感覚・経験は固有である。この固有の在り方が大きな枠としての共同主観に含まれる。鶏を食料として眺める人の場合と、ペットとして眺める人の場合は、鶏の現れ方は人に応じて異なるが、この差異を含めて鶏の眺めが共同主観の枠に入る。互いに矛盾する天動説と地動説とも共同主観の枠内である。また共同主観からほど遠いと思われる独我論もその成立する根拠（材料・言語）を共同主観に依存せざるを得ない。この意味で独我論は共同主観の一景色であり、素朴实在論の枠に入ってくる。

## 4.2 伝聞による实在

实在は一人の人間が個別に直接体験して認識する対象に限らない。他人が体験して实在化した多数無数の対象も共有され、むら・ゆらぎを含みながら实在化する。この共有された实在に包まれて社会構造が成り立つ。遠い外国で発生した事件もニュースで伝わり、新しい科学理論や哲学の論点も論文や著作で实在に組み込まれる。教育も訓練もこの構造に基づいている。この構造がすなわち伝聞である。小説も映画も個人の直接体験を超えて共有される世界を展開する。私たちは直接見たこともないものでも实在すると考えている。電子や素粒子はその例である。個人が直接体験する以上の多くの対象を、伝聞を通して实在として得ている。伝聞にはむら・ゆらぎがあるから正否を含んで共有され、言語によって伝搬し、共同主観の四肢的構造に組み込まれる。

## 4.3 共同主観の四肢的構造がないとき

廣松渉のいう共同主観の四肢的構造が無い場合は対象が存在しえない。四谷怪談のお岩さんを知る人がいないパリのシャンゼリゼには、お岩さんは出られないのである。シャンゼリゼに限らず現代の夜でも明るい市街地には幽霊は出られない。第二次大戦後の日本の、地方の郡部は街路灯もなく夜は漆黒の闇であった。私の子供時代に伯母が夜道で遭遇した幽霊の話をしていた。「遺族のことを心配した誰々さんの幽霊が出て私に訴えた」

という話で聞かされた。これを迷信であるとか幻覚であるとして、切り捨てるのが現在の常識であることは、ほとんどの人が納得することであろう。しかし最近「肩こりは幽霊の仕業」とするネット記述問題が報道されたように、少数ながら幽霊サポーターはいる。素朴实在論のマイナーな空間に幽霊は現在でも存在するのである。「何か出るかも！」との不安で予期したとおり幽霊に遭遇した伯母にとって幽霊は実在するものであった。現代ではLED照明の街路灯の下は極めて明るく、誰も幽霊を予期も期待もしないから、現在では市街の夜道に幽霊が出ることは滅多にないであろうが。

当時、幽霊が存在していたのは天動説が正統であったことと同様の存在様式である。これらは共同主観の四肢構造に基づく素朴实在論の存在様式である。また、幽霊は存在せず、迷信であるとする科学的説明も同様に共同主観の四肢構造に基づく素朴实在論の存在様式である。当然、対象の存在認識には、むら、ゆらぎ、変異があるし、変異の大きいマイナーな存在は多数からは異端扱いされる。

#### 4.4 物自体

前述したようにカントは『純粹理性批判』で「物自体」を人は認識できない、とした。すなわち人はいわばフィルタを通して得た現象のみを把握するしかないのであるから、現象の背後にある物自体は捉えられない、という。空間・時間という直観形式と、量・質・関係・様相で構成される範疇というフィルタとで物自体の現れ方である現象を認識するのだ、とする。ここで素朴实在論が目指す存在をカントのいう「物自体」と同一視してはならない。

素朴な实在とは、カントの範疇であろうと他の雑多なフィルタであろうと、人が「在る」と認識した対象の实在をいう。素朴な实在とは、多数の人のそれぞれが「在る」と思う「モノ」や「コト」の全体である。「多数のそれぞれ」の認識対象であることから、時代や国家、民族、宗教の違いを含めて、集団間・個人間の矛盾・むら・ゆらぎ・非科学性・非論理性的な

どを内包する存在である。例えば幽霊を見た人にとっては幽霊なるものが存在することになる。もちろん幽霊を信じない人には幽霊は存在せず見ることもない。カントも理性の限界としての例として、有神論も無神論も超越論的仮象であるとしている。その超越論的仮象を含めて高邁な哲学の存在も、墓場に出るお化けの存在も、素朴実在論では同等に存在する対象である。

## 5. 存在の対象

### 5.1 何を見るのか？

存在を対象として認識するとき、人は五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を媒介とする。この五感の制約内で外界を認識するが、このうち視覚を例に考えてみる。人は一体、何を見るのであろうか。ここで怖いモノを見る場合を考えてみよう。日本で見える仏教地獄絵図では鬼が罪人を懲らしめている。鬼は牙を剥いていて怖いものの特徴を表している。欧州の美術館でもキリスト教による地獄図が展示されていることがあるが、これも同様に鬼に相当するものがいて、牙をむいて罪人を痛めつけている。ここから人間の恐怖対象の特性が共通していることが分かる。それは大きく口を開き、牙を剥いて襲い掛かってくる存在、すなわち猛獣である。この存在を人が怖がるのは、捕食動物から逃げる動物の血筋を人間が引いていることの証左である。人に牙を剥いて遅い掛かるのは猛獣だけではない。SF映画で登場するエイリアンも牙を剥く。観客はエイリアンの牙にドキドキして物語に見入る。SFすなわちサイエンス・フィクション「空想科学」であるが「科学」の名の下に原始的な牙が見どころとなる。この科学と原始性の奇妙な組み合わせとなるところは素朴実在論冥利に尽きるということになる。

さて、科学の進展に伴い、人は牙を剥く以外の恐怖の存在を見出した。例を二つ挙げればウイルスと放射能である。ウイルスは目に見えないし、放射能も牙を剥いて襲いかかる訳ではない。ここでは五感ではなく、科学

知識を媒介にして危険物の存在を知ることになる。放射能は測定器の音や指針を介してその危険を知る。危険物と自己との間に直接性がないために、生体知が効かず、逃げるにも反射性がない。対応するには知が体系化された科学知に依るしかない。放射能汚染から急ぎ退避する大人と一緒に走る幼子は科学知をまだ持たぬゆえ、牙を剥いて遅い掛かる猛獣を背後に感じることになろう。

このように人は何を見るか、は動物の種の生存・繁殖に資する道を探すことに基礎があることになる。世界の見方は、その種固有に有利な方法で発達し、それを種で共有するのが有効という形で発展してきたのであろう。この種最適・種共有こそ素朴実在論の基礎である。皆で同じ方向に走り、同じ獲物を追い、同じように食べる。言語・共同主観や四肢の構造も、同じ基礎を持つ。

ここから集団が先に存在し、個人の存在はその後と考えるのが正当である。ワイトゲンシュタインがいう私的言語の非存在と相応する形で、まず共通言語があって実在があり、共通行動によって実在を把握する。

## 5.2 見る者は何か…視点

野矢茂樹は著書『心という難問』で対象を見る側の主体の「視点」は世界の中にある、という。一方ワイトゲンシュタインは『論理哲学論考』で「主体は世界に属さない。それは世界の限界なのだ。」<sup>2)</sup>という。視点と主体とは語は異なるものの、このとき両者は視点の存在について異なる主張をしている。主体の視点はどこにあるのだろうか。「ここから見ると…」という表現の「ここ」は世界の中にある。「この視点」と称して視点を対象化するとき、対象化された視点は景色として世界の中にある。野矢茂樹の論点のとおりである。

しかし、対象化を行う主体の視点は世界を作るゆえに、世界には含まれない。野球で外野手が飛球を追うとき、その視点は世界の中にある…と第三者はいえる。しかし当事者にとって視点は世界の中にはない。世界の中

で当事者の視点そのものを見ることはできない。「視点」は自己の中で対象化された場合のみ対象化視点として世界の中にある。それは自己を対象化するメタ意識によってのみ把握される。メタ意識が存在しない場合、たとえば確認はできないが、人以外の動物ではメタ意識が存在しない、と想定すれば、その視点は世界の中にはない。ややこしいが、その動物を観察する人からは、その動物の視点は世界の中にある、といえる。

大事なこと、それは視点があって初めて対象が存在する、ということである。視点が存在しなければ、それに対応する世界が存在し得ず、よって対象について云々できない。人類が絶滅したと仮定して、すなわち全ての視点が消失したと仮定して、そのとき「それでも地球は回る」のであろうか。視点が存在する現時点から見れば問題なくそういえるのであるが。

もちろん、このような場合でも素朴实在論では「それでも地球は回る」という。このように言明するのが素朴实在論の存在意義であるから。

### 5.3 錯覚と实在

無いものを在るがごとくいう錯覚は素朴实在論の愚かな例と捉えられられるかもしれない。登山道を歩いていたとき、前方に落ちている白地に朱色模様の綺麗な小さな紐を見つけたことがある。「綺麗な紐だ」と考えながら、拾おうとして手を伸ばしたら、その紐が動いた。よく見ると、それは紐ではなく、赤ちゃんヘビであると分かった。このとき、最初の紐という知覚は錯覚であり、後者のヘビという知覚が正しい知覚であって、赤ちゃんヘビという認識に至る、ということになる。「登山道で赤ちゃんヘビを朱色模様のひも紐に見間違えた」というのが正しい認識に基づく正しい事実ということになる。私はそう報告する。

しかし、本当にそうであろうか。知覚不十分でやはり紐に過ぎなかったのではないか。あるいは「赤ちゃんヘビ」ではなく、小型の大人のヘビではなかったのか。曖昧さが残る。しかし、登山道で紐と小ヘビとを見間違える話は、真なる視点（があると仮定して）からの事実と同じであろうが、

異なっていくが、大したことではない。私以外に証人もいない。この場合は「登山道で赤ちゃんヘビを朱色模様のヒモに見間違えた」という私の報告は共同主観として納得できるものであり、よって私の体験としての正しい事実として受け入れられる。もちろん、私が恒常的な嘘つき人ではない、という部分信念が共同主観に含まれていなければならない。このことから「錯覚」として判明されない限り、認識した対象はそのとおりに存在するものと素朴実在論はいう。差異・むら・ゆらぎの範囲で吸収されてしまうのである。

#### 5.4 存在濃度

実在や真実・事実は時代・国家・民族・宗教・科学などの変数の関数値であるとした。また、幽霊などマイナーながら実在するとし、加えて個々人々に応じて、むら・ゆらぎがあるとした。こうなるといったい何が実在するのか確定できないではないか、という当然の反論が生じるだろう。この反論は科学的実在論に立てば、非科学的幽霊の実在を肯定するのは納得しがたい、となるがこれは理解できる。私も幽霊の実在を信じている訳ではない。しかし世界を見渡せば信ずる神の違いによって戦争・紛争が生じている。また互いに矛盾する価値観もある。極めてマイナーであるが、幽霊の実在を信じる者がいれば、それは素朴実在を構成することになる。これらの点で素朴実在は極めて広く存在をカバーすることになる。

そこで素朴実在のいい加減さをもう少し明確にする必要がある。素朴実在は視点を持つ者すなわち人の観点で存在する全てであるため、全員が一致してその存在を認識する対象もあれば、一個人でしか認識し得ない存在まで多種多様である。この「度合い」が素朴実在の量を示すことになる。この度合いを示すものを「存在濃度」として名付けておく。存在濃度という計量を導入することで、これまで説明してきた素朴実在論の胡散臭さが幾分は解消するであろう。殆どの人々が一致して認める存在、例えば日本最高峰の富士山の存在濃度はほぼ100%になる。一方幽霊存在の支持者は極

めて少ないであろうから、幽霊の存在濃度は1%未満であろう、といえる。ただしこの存在濃度案には、科学的観点では不十分という指摘もありうる。それは支持者数のみで説明しているからである。例えば素粒子について多くの人は知らないであろうから、存在濃度が低下することになり、これは科学的観点からは受け入れ難い。この問題の対応として存在濃度を関数とし、その変数として有効なものを選択すれば解決できる。素粒子の素朴实在は高まり、幽霊の素朴实在レベルは低下するであろう。ただ、関数の変数の重みづけをする際、その当事者の世界像で値が変わる。宗教者は宗教を重くし、科学者は科学を重くする。このむら・ゆらぎがまた素朴实在論の本質でもあるのだが。

## 6. 素朴实在論の普遍性

共同主観と物語性のともなう、素朴实在論の普遍性をいうとき、他の説明や理論を否定するものではない。唯心論、唯物論、心身二元論、絶対論、相対論など諸説明、さらには有神論、無神論など一切を含めての説明の存在を否定するものではない。科学や宗教などを含めて、それらが存在する一番の基底が、共同主観と物語性をともなう素朴实在の世界である。カントのいう超越論的仮象も素朴に实在できる。素朴实在の世界の上に科学・宗教・哲学があり、絶対精神・批判論・観念論を展開できる。孫悟空が筋斗雲に乗って世界の果てに飛び、世界の果てに記したと自慢した碑文は、じつは釈迦の指であった、という物語がある。素朴实在論は釈迦の手の平のようなものである。といって釈迦のように高貴といっている訳ではない。人類に課せられた枠のような構造である。この枠内で科学も哲学も実在もいいうるのである。深い省察を経てデカルトが達した「我思う、故に我あり」とする唯心論的言明にも、その高尚さを損なうことなく素朴实在論が張り付く。

この特性から素朴实在論は人間の世界認識の基本的構造であり、普遍性を持つといえる。素朴という形容詞が付く实在の姿は、生物発生から動物

進化の過程で得た人類の特質であろう。

## 7. おわりに

素朴实在論は他の存在説明論への下剋上ではない。人が生きる基層の实在論であってここから離れることはできない实在論であり普遍性を持つ。この素朴实在論をより確固とするための科学的方法として、個人毎、集団毎に異なる实在の程度を表すものとして存在濃度なる計量概念を導入したが、これによって素朴实在論の合理性が説明できる。しかしながら存在濃度自体が素朴に实在するという、素朴实在論固有の循環性があることに留意すべきである。

## 注

- 1) リタ・カーター (2003) 『脳と意識の地形図』藤井留美訳 原書房 p.47  
「何かを意識するには、その概念をもたなくてはならない」とリタ・カーターはいう。  
意識が対象を、あるもの、として認識するには、対象が、あるもの、という概念の枠に入る必要がある。この、あるもの、は先天的に与えられるほか、自己体験、教育、伝聞などの経験で新概念として獲得していく。教えられて「ああ、なるほど!」と理解した場合にはその対象の概念を獲得したことになり、そこに意識を集中できるようになる。ワインや日本酒の味わいも、その固有の概念を獲得してこそ「本来」と通称される味覚を味わうことができる。
- 2) L. ヴイトゲンシュタイン (1996) 『論理哲学論考』藤本隆志／坂井秀寿訳 法政大学出版局 p.170, 5.632。さらに続けて、5.633「世界のどこに、形而上学的な主体が認められるのか。君は、眼と視野との関係とまったく同じ関係が、ここになりたつという。しかし君は、自分の眼を実際に見ているわけではない。…」。すなわち視点を対象化して世界の中を含めることはできない、という。ここではメタ意識や第三者の視点については言及されていない。

## 参 考 文 献

- ウイトゲンシュタイン (2002) 『哲学探究 (8ウイトゲンシュタイン全集)』藤本隆志訳 大修館書店

- カント（1989）『純粹理性批判』高峯一愚訳 河出書房新社  
デカルト（1997）『方法序説』谷川多佳子訳 岩波文庫  
野矢茂樹（2016）『心という難問』講談社  
廣松渉（1996）『世界の共同主観的存在構造』岩波書店